

モンゴルの遊牧における移動の理由と種類について

吉田 順一

はじめに

遊牧とは、人と家畜が移動しながら牧地を利用する牧畜である。従って移動について具体的に分析し、深く理解することは、遊牧の本質を知るために、大切である。

移動の問題については、さまざまな検討すべき側面がある。移動の理由、種類、回数、距離、方向、歴史的变化その他である。

本稿では、移動のこうしたあらゆる側面を取り扱うことはしない。それは、紙数の関係もあるが、また私の研究の状況にもよる。本稿では、モンゴル人民共和国の資料に大体基づいて、同国の遊牧における移動の問題のうち、移動の理由および移動の種類についてののみ、考察することにした。

モンゴル人民共和国では近年、移動の問題について、かつてとかなり異なる点が現われてきた。すなわち牧民の定住傾向を増やすという

大方針のもとに、長距離の移動をおさえ、それとともに移動の様式も、ある種の移動——オトルやゾーボル・ヌーデルなど——を特に評価し、それらがかつてもっていた内容に、新しい内容を盛り込むというようになつてきたのである（7—169—181頁¹）。

しかし本稿では、こうした近年の新しい移動の傾向についてもほとんど触れず、できるだけ伝統的なモンゴルの遊牧における移動の理由と種類を検討する。移動の最近の状況、それに移動の回数、距離などといった問題は、すべて別稿に譲ることにした。

なお、近年のモンゴルの牧畜書から伝統的な古い遊牧のさまざまな問題を探り出すことは、次第に困難になつてきており、そうした理由によつて、本稿の記述に多少の誤りがないとはいえない。それらについてはいずれ補正することにした。

一 移動の理由

(一)さまざまな移動の理由

モンゴルの遊牧における移動のさまざまな理由についてのべたものとして、ソ連邦のイ・エフ・シュリジェンコの考えが、よく引用される(10—129頁、6—43頁)。かれの考えは、つぎのとおりである。

(1)夏の水不足、冬の雪不足。(2)家畜のための飼料の不足。(3)主要な種類の家畜のために不満足な牧地の植物の構成。(4)暑いときには涼しい、冬には暖かい場所をもつ必要性。(5)家畜のための塩沢の不足。(6)畜糞によってキャンプ地がよごれること。(7)家畜の疫病。(8)他の経営体との連合の必要性。(9)人の死(23—23頁)。

一方、モンゴル人の側では、シュリジェンコよりずっと前に、ヤ・ツェベルがこのことについて、つぎのように記している。(1)夏の高温は涼しい、風が吹きつける場所を探し求めさせ、冬のいてつく風は防護された場所を探し求めさせる。(2)夏の水の欠乏、冬の雪の不足。(3)土地の条件を理由とする飼料の欠乏。(4)四季よっての飼料の存在または欠乏(春には早く草が出る場所(ооn)を求め、秋にはそれがより遅くまで残っている場所(дза)を求める)。(5)それらの収量を決める条件とされた牧草の存在。(6)飼料植物の種類の構成。(7)家族またはホトンが駐営した区域において飼料がなくなったこと。(8)ひでり(Caui, Gan)または過度の降雪(3yH, zud)の結果による飼料の消失。

(9)家畜が一定のときに必要とするホジルの不足。(10)一つの場所における長期間の滞在ののちの、畜糞による土壌の汚染。(11)キャンプ地の近くでの人の死、もしくは未知の理由で家畜の疫病がはじまるか、あるいはまた移動の理由となる家畜の流行病その他が起った場合。(12)ホトン組織における牧養のための、他のアイルとの結合もしくはそれからの離脱の可能性(20—30頁)。

以上のツェベルの記述のうち、(3)は、家畜が食べたことやその他の理由による牧地の草の状態の悪化についてのべたものと思われる。(4)の Cynb とはモンゴル語の coH (coH) のことで、「秋に枯れることな」く残った草をさす(21—48頁)。つまり秋になって草が枯れる時期に、さまざまな条件によって枯れることが遅れた草のことである。こういう草は、言うまでもなく枯草より養分が多く、家畜の良い飼料となるのである。(5)はよくわからない点がある。各季節において牧地に主要な牧草というものがあり、そうした主要な牧草の作柄のよい牧地があれば、その牧地は牧民をひきつけ、移動の理由となるという意味か。(7)のホトン(xoton)とはモンゴル語の xot (qota) のことであり、家族(Айл илという)がいくつかいっしょにまとまっているキャンプをいう。それらアイルやホトンがある場所にキャンプし、その結果その付近の牧草が悪くなることを言っていると思われる。(8)のゾドには、過度の降雪または過度の積雪によるゾドだけがあるのではなく、無積雪によるゾド、酷寒によるゾド、長時間の猛吹雪によるゾド、トモル・ンド төмөр 3yH (temür Zud) じきり鉄のゾドという意味で、

積雪が気温上昇の結果溶け出したのち、気温の降下によって氷のように凍結し、家畜が草を食べられなくなるゾド、以上の二つ以上のゾドが競合しておこるゾドの、計六種類がある（4—126頁、注²。22—10—17頁、2—41頁）。(9)のホジル (хыжыл, quii) とはソーダのこと、シュリジェンコの(5)の「塩沢」もホジルのことである。

最近モンゴルの歴史学者デー・ゴンゴルも移動の理由について記した。今かれの見解に私が便宜上番号を付して、列挙してみる。(1)夏には雨が降らず、青草、ホジルと水が不足し、表土が乾燥していること。(2)冬の厳寒のときには、暖かな、風よけ場である冬营地、そして牧草地が氷雪に覆われ、草が繰返し食われること。(3)春になれば、保存されていた枯草がなくなること。(4)秋になれば、雪を求めること。(5)草の構成と土地被覆が家畜の種類に、あまりにも不適當になること。(6)その居住地において、かんばつやゾドなどの天災をのりきる希望のないことがあらかじめ知られること。(7)季節を問わず、人と家畜のさまざまな病気や伝染病の発生。(8)キャンプ地が焼け、牧地の火事と洪水の苦しみに出会うこと。(9)大戦乱などの勃発（8—308頁）。

以上の三人の学者の考えを整理すると、ツェベルの(3)と(8)は、要するに家畜の飼料である牧草の問題に係り、同じくゴンゴルの(1)と(5)は、(1)の中でのべられているホジルと水の不足という異質な移動の理由を除けば、すべて牧草に係っている。ゴンゴルの(1)の水不足というのは、夏季の水の不足についてだけのべたものであり、冬の雪不足については何ら触れていないが、ツェベルとシュリジェンコの(1)に大

体対応するとみて許されるであらう。またゴンゴルの(1)の文中のホジル不足の記述は、ツェベルの(9)、シュリジェンコの(5)に対応する。ツェベルの(4)はシュリジェンコの(7)と(9)に対応する。ツェベルの(4)とゴンゴルの(5)は、シュリジェンコの(3)に対応する。

以上のようにみた上で、以下に三人の研究者の説に基本的に依拠しつつ、私見も加えて移動の理由を具体的にまとめてみる。

(1)牧草の不足または牧草の状態の悪化。すなわち各季節において、牧地の草が家畜に食われた結果不足すること、またはその状態が悪化すること。

(2)四季いずれにおいても、良い牧草を求めること。特に春には青草が早く生えてくる場所を求め、秋には遅くまで枯れないで残っている青草（雪）の多くある場所を求めること。

(3)牧民の所有する家畜の種類と、それらの家畜が食う牧地の植物（家畜によって食べる草の種類が異なる）の構成が一致しないこと。

(4)家畜の飼料としての、暖かな季節の水、寒い季節の雪が不足すること。

(5)ホジルまたはホジルの渗出地が不足すること。

(6)夏は風通しがよく涼しい、ハエや蚊、ブヨ、アブなどの少ない場所、冬は風をさえぎる、日当たりのよい場所を必要とすること。

(7)暖かい時期のかんばつ、寒い時期のゾドなどの天災を、現在の居住地にとどまっただけのりきることが困難なこと。

(8)キャンプ地や牧地が焼けたり、洪水がおこること。

(9) キャンプ地が家畜の排泄した糞尿によってきたなくなり、ぬかるむこと。

(10) 家畜が現在の牧地に飽き、ひいて食欲が減退することを避けること、または逆に食欲を増進させること。

(11) アイルが他のアイルと共同して牧畜するためホタなどを形成すること、およびそのホタなどが解散したり、アイルがホタなどから分離すること。

(12) 未知の理由による家畜の病気の発生、また流行病の発生。

(13) キャンプ地およびその周辺での人の死。

(14) 大戦乱などの勃発。

以上の一四種類の移動理由のうち、(10)は、次章でシャグラジ・ヌーフを扱かう場所でのべるように、一つの居住地に長期間とどまった結果として、家畜が牧地に飽き、食欲を失うに至ることを避け、逆に早め早めに移動して家畜を常に新鮮な気分にして食欲を増進させることが移動の理由として存在し、これは他の一三種類の移動理由のいずれにも入らないので、一項目として加えたものである。

これら一四種類の移動の理由をみると、その多くは、キャンプ地と牧地の条件、状態を理由とするものであることがわかる。すなわち(1)～(9)がそうである。(10)は家畜の精神衛生の問題であるが、牧地の問題も関連している。(11)～(14)は牧地と無関係な移動の理由である。以上のことから遊牧における移動の理由のうち、最も多くを占めるのは、キャンプ地と牧地をあわせた、遊牧民と家畜の居住地の問題であること

がわかる。中でも牧地が最も重要である。従って遊牧における移動というのは、基本的には牧地利用上の問題であるということになるのである。そしてこの牧地の条件を構成する種々の要素のうちでも、牧草の問題が最も基本的な移動の理由であると思われる。

(一) 移動の根本的理由

さて、前節において私は、移動の理由をその種類別に列挙し、牧地の問題が最も基本的であると思われるとのべたのであるが、本節では、そうした考えを踏まえて、モンゴルの遊牧における移動の根本的理由、要因というのは、どこに求められるかについて、私の考えをまとめてみたい。

モンゴルのジャグバルは、シュリジェンコの右の考えを引用したのち、それに何のコメントも加えず、モンゴルにおいて遊牧経済が支配的であることの理由を、第一に自然的気候的条件、第二に革命前のモンゴルの生産力の発展とその社会—経済制度の低い水準に求めた。

今、このうちの第一の自然的気候的条件というのは、モンゴルの領域の広大さとその領域内の地貌と気候条件の複雑さに基づく植生の多様さ、そしてまた厳しい大陸性気候によって毎年ひきおこされる各地の牧地の植物の収量の不均等さを指し、このような条件のもとで、特に完全に植物資源を利用し、よい太り具合、冬の無事なおりきを組織するためには、転々と絶えず移動しなければならないとする(10—一二九頁)。

だが、この、牧地の植生の多様さと毎年の各地の牧地の間の牧草の成育のむらに移動の大きな理由を求める考えに、私は疑問をもつ。これでは、モンゴル人が冬の居住地を根拠地とし、それ以外の季節に比較的定期的な移動を、比較的定まった場所で行なうことを、うまく説明できないであらう。

ジャグバラルの指摘した第二の点については、モンゴルの他の研究者も「牧畜に移動の方法によって従事する主要な理由は、当該社会の生産力の水準が未発達なことである」と指摘しており(7—170頁)、現在のモンゴルにおける共通的な見解と思われる。

私は、こうした生産力の問題の重要性を認めるけれども、それ以上にその生産力の問題の根底に横たわっているモンゴルのステップの自然環境を重要視せざるを得ない。生産力の向上が顕著な最近のモンゴルにおいてさえ、あまり良好でないステップでは遊牧の定着化が緩慢であるとみられるのが、逆にステップ的自然環境と遊牧との関わりの深さを示していると、私は思うのである。

一方、ゴンゴルは、つぎのようにのべている。「移動して生活する習慣の決定的要因はというと、居住地が広大であり、人口が比較的小なくて分散居住し、個人に割り当てられる家畜の頭数が多く、住居家財をはじめとするものが定住地域に比べると移動生活の状態に適合した軽くて携帯しやすいものである。これらのことはモンゴル族の歴史の具体的な活動によって、すでに証明されているのである」(8—130九頁)。

私はこの考えの多くの部分に同調しがたい。なぜなら、住居、家財が携帯に便利であるという点は、移動の理由とはなることができず、それは遊牧にたいする生活様式の適応の結果として生じたことであるし、人口が少なくて分散して居住しているという点も、遊牧生産様式とその生産力の反映であるともみられ、移動の要因とはなることはできない。居住地が広大であるという点も、移動の理由と無関係である。採るべき点は、結局、牧民各人に割り当てられる家畜の頭数が多いという点だけである。この一文を私なりに牧民の所有家畜の多さというように言いかえるならば、これは前節で紹介した三人の研究者の移動理由のいずれにも含まれていなかったが、私としては一つの立派な移動の理由となりうると思う。多くの家畜をもっている牧民の移動回数が多い(7—177頁)という当然の事実が、このように考える根拠である。遊牧民の生活を支えるに足る程度頭数の家畜を所有し飼育するならば、必然的に移動せざるをえなくなる。そしてその所有家畜が増えるにつれて移動回数も増えるのである。

それとともに移動の要因として、すでに記したように、何といっても牧地の問題がとりあげられるべきであらう。

牧地は、モンゴル語でビルチェールまたはベルチェール *ᠪᠢᠷᠴᠡᠭᠠᠷ* (*Beliger*) という。モンゴルの牧畜というのは、昔も今も、このビルチェールの牧畜だとされている。ビルチェール牧畜とは、定着的飼料給養牧畜、半定着的飼料給養または半ビルチェール牧畜とともに、牧畜の三つの種類の一つであり、「家畜を年中ビルチェールによ

って飼育する」牧畜である(11—18—19頁)。

ところでこのビルチェールというのは、バイガリン・ビルチェール *Gairanin Birsheer* つまり「自然の牧地」ともしばしばいわれ、これがモンゴルの国土の大部分を占めることが強調されてきた。そして「現代において、たとい草の飼料(干草のこと—吉田)をかなり準備しているとしても、四季にどここの地帯においてもビルチェールを利用しているのであって、従ってモンゴル国の家畜の飼料の基礎は、自然のビルチェールなのである」などとのべられている(9—18頁。また12—14頁など)。

このようなモンゴルの自然のビルチェールにおいては、乾燥アジアの気候条件とその他の地理的条件がそのまま支配しており、草の量は概して少なく(25—175—176頁)、家畜に食われた草の復元力は弱い(25—177頁)。モンゴル人民共和国において、ある年に平年並の降雨量があったとして、生えてきた青草を家畜に食わせたのち、同じ年のうちにその草がもとのようになり、もう一度家畜に食わせられる牧地のある地域というのは、森林ステップ帯と純ステップ地帯の北部だけであり、国土の多くを占める高山帯、純ステップ地帯の南部、ゴビ地帯では、その可能性がない(12—18—19頁)。従って、モンゴルの自然の牧地の多くでは、家畜が数日間食べた草は、来年また生えてくるまで利用が困難であり、無理に利用したとしても家畜を太らせることはできない。青草の生えている暖かい時期に家畜を太らせられないならば、その牧畜は失敗であり、厳しい冬春を無事のりきること

ができず、家畜は大きな損害を蒙る(2—139—143頁)。こうして移動は不可避となる。

以上の説明は、森林ステップ帯と純ステップ地帯北部では移動が行なわれないということの意味していない。そこでは他の地域に比べて移動回数と距離が少ないだけである。

牧地の条件が移動に密接に関係していることを具体的に示すと、まず次章のノタク・ソリフの項でのべるように、草量の多いハンガイ地帯(高山帯、タイガ帯、森林ステップ帯から成る)とその次に草量の多い純ステップ地帯、そして最も草量の少ないゴビ地帯(3—142—143頁)では、移動回数、距離ともにハンガイ地帯が最も少なく、純ステップ地帯がやや多くなり、ゴビ地帯が最も多い。

つぎに同じ地帯で牧畜する場合でも、利用する牧地の草量の具合によって移動に違いが生じる。すなわち「中級の家畜を有するゴビのアイマク(行政単位—吉田)の家庭の移動の状態において、イ・フ・ツァツェンキン(M. A. Tsutsenkin)、フ・ユナトフ(A. Ionarov)らの行った研究からみると、中級の生産量のある年において、よい牧地で五—一〇回、中級の牧地で一五—二〇回、悪い牧地で二五—三〇回移動しているという」とある(7—161頁)。

さらに同じ地方であっても、平年と天災の年では、大きな違いがでてくるのである。すなわち「普通の年、それほど遠い移動をせず(三〇—四〇キロメートルの範囲で)、ただ天災の年のみ、よい居住地を求めて、牧人たちは数百キロメートルもの遠い移動を行なっている…

…」と、ある地方についてのべられているとおりである(25—27頁—
一七八頁)。

モンゴルの遊牧における移動の基本的な要因は、明らかに牧民が自然の牧地に四季を通じていつも全面的に依拠して牧畜することにある。これに既述の、牧民が自己の生計を支えるに足る頭数と種類の家畜を飼育するというもう一つの重要な条件が加わって、移動の根本的な要因が形成されているとみたい。

前節でまとめた移動のさまざまな理由の多くのものは、このような根本的要因を基礎として生じるものであることは、言うまでもないことである。この移動の根本的な要因を基礎として、まず(1)の牧草の状態の悪化を理由とする移動が生じ、(2)の良草を求めるといふ積極的な移動が生じ、その他の牧地に関連した移動の理由が規則的あるいは場合によって生じ、さらに牧地外の条件を理由とする移動が加わり、全体としてモンゴルの遊牧民の移動というものが行なわれてきたのである。

二 移動の種類

移動の種類という点、前章でのべたさまざまな移動の理由がそのまま独立した移動の種類となるともいえる。例えば、「牧草の悪化による移動」とか、「天災から避難する移動」という具合に。こういう形の移動の種類の分類法も、確かに存在するであろう。

またそれとともに、季節的移動とか一季節内での移動とかいう分類

法も可能であろう。

だが本稿では、別の方法に基づく分類法を採用したい。それはモンゴル人が移動を表わすために用いている言葉に基づいて移動の種類を分ける方法である。この方法によると、従来あまり注意されていなかった移動の側面、特に移動様式について、多くのことを知ることができると思われる。

モンゴル人が移動を表わす言葉として、ヌーフ *hyvax* (*negudek*) (動詞)、ヌーデル *hyvaxar* (*negudel*) (名詞) がある。これは移動一般を表わす語である。このヌーフ、ヌーデルの具体的方法として、つぎのものがあげられる。

- (イ) ノタク・ソリフ
- (ロ) オトルロフ
- (ハ) ゴーボル・ヌーデル・ヒーフ
- (ニ) ボーリ・ソリフ
- (ホ) シャグラジ・ヌーフ

これらについて、以下に順次説明していく。

- (イ) ノタク・ソリフ *hytar solix* (*nutug soliqu*)

これは「居住地を変える」という意味をもつ。この語はヌーフとはほぼ同じ意味内容で用いられることがある。ノタク・セルゲフ *hytar cetrax* (*nutug selgukh*) という語もこれと同じ意味で使われることがあるようである。しかしノタク・セルゲフとは、後述のように本来、より近くに居住地を移すという意味をもつ語だと思われる。

ノタク・ソリフとは、さまざまの理由から、あるアイルまたはホタが、現在の居住地つまりキャンプ地と牧地の双方を、新しい居住地に移すことをいう。このためにアイルまたはホタの全員は、ゲルその他（限られた固定施設は除く）を引き払い、所有家畜の全てを連れ、自己の希望にかなう居住地に移り、そこに新しいキャンプを設営し、その周辺の牧地で家畜を飼育する。

これは「民衆が家畜群の牧地を変えるおもな方法である」とのべられているように（5—五三頁）、最も基本的な移動であり、それだけに前章でのべた移動理由のほとんどのものが関係している。季節的移動もノタク・ソリフの形をとって行なわれる。

ノタク・ソリフは、ステップの各地帯によって、その具体的なあり方に相違があり、それにもなつて、それらの移動にたいして特別の言葉が用いられることがある。「家畜のノタク・ソリフを、ハンガイ、ゴビ、純ステップ各地帯によって区別してみると、セルゲフ、トブシフ、オルトローフと、三つの基本的なものに分けてみることができる。すなわちハンガイ地方では水がよいので、居住地を近くにセルゲフし、純ステップでは家畜の飼料（となる草、草の生え方——吉田）が均等でないから、トブシフして移動しており、一方ゴビでは水の量が少なく植物は短かく疎であるので、オルトローフ・ヌーデルによって牧地を利用してきた」とあるとおりである（4—二四頁）。

セルゲフはノタク・セルゲフと同じであり、近い所、近い所へと移動する。すなわち一キャンプ地に二〜三ヶ月滞在したのちの一回の移

動距離は一〜三キロメートルであり、一年に四〜五回移動するという（4—二四頁）。

トブシフ *toḥuix (toḥiqun)* は、かなり離れた所に移動する。すなわち一キャンプ地に三〇〜四五日滞在したのちの一回の移動距離は一〇〜一五キロメートルである。そして一年に一〇〜一二回移動する（4—二四頁）。

オルトローフ *opreox (oregalek)* は遠くに移動する。すなわち一キャンプ地に一五〜二五日滞在したのちの一回の移動距離は二〇〜三〇キロメートルである。そして一年に一六〜一八回移動する（4—二四頁）。

セルゲフは「変える、移す」という意味、トブシフは「遠め遠めに突き通して縫う」（21—五三二頁）という原義から、そのように移動するということ意味をもつに至ったものであろう。オルトローフは、*opreox (oregalek)* の動詞形であり、オルトローとは駅伝制における駅と駅間の距離が約三〇キロメートルであることから、大体その位ずつ移動するという意味が生じたのであろう。

ステップの各地帯における移動回数と移動距離の違いは、先に引用した記述にも触れられていたように、それら各地帯の水と草の量に基づく。ところでハンガイ地帯でもその南部は純ステップ地帯と牧地の条件が近く、ゴビ地帯でもその北部は純ステップ南部と牧地の条件が近い。そこで、ハンガイ地帯ではセルゲフだけでなく、トブシフも併用され、ゴビ地帯ではオルトローフだけでなくトブシフも存在する

(4—二四頁)。

(d) オトルロフ oroplox (otolagun) オトル、オトル・ヌーデルともいう。

訳すのが難しい語である。⁽²⁾ 辞書には「家畜の牧地に従って、軽減し分離して家畜を飼うこと」とあるが(21—四二七頁)、具体的には、現在滞在しているキャンプ地と牧地はそのままにして、そのキャンプ地にいるアイルまたはホタなどの一部の者(多くは成年男子、ときには夫婦)が家族(女、子供、老人など)と別れ、小型のゲルや軽便なテントそれに若干の必要品をもって、そのアイルやホタなどが所有する家畜の一部の種類(羊だけ、山羊だけ、羊と山羊、馬だけなど)の全部または一部を伴って、草、水、ホジルその他の条件が良好な牧地を求めて、大体において比較的遠くまたはかなり遠くに移動し(オトルに出た先でまた移動することもある。この場合の移動はノタク・セルゲフとかゾーボル・ヌーデルの形で行なわれることが多いようである)、オトルの目的(後述)を達したならば、また家族のいる居住地にもどるといふ移動の様式である(18—七二—七八頁。9—一二—一六頁。18—一三〇—一三六頁。6—五三頁。その他)。

オトルについて具体的にのべた文を二つ引用する。まず最初は、清代モンゴルに関するもので、モンゴル人民共和国西部のハンホー山脈方面の一ホショー(旗)のオトルの状態をのべたもの。「冬營地を保護し、厳しい時期をすごさせるために、十頭以上の頭数の馬を冬營地に残さないようにして、冬の初めの月の五日以内にハンガイにおけるいづれかの土地でいっしょにオトルに出し、もしオトルの期間より

前にもどつて来るならば、ふたたびおい出し、冬營地に損害を蒙らせて従わぬ者たちを処罰するなどして、牧地を利用することを調整していた」⁽³⁾(14—一八一—一九頁)。

つぎにやや長文であるが、より具体的にオトルの方法について記したものを引用する。この記述には、模範化した点と近年の新しい変化とが少し入っている。「わが国の大部分の地方の牧人たちは、冬が始まるまえに、人里離れたすばらしい牧地と水のある地方を自身で出かけてみて、それから自分の全ての馬群をその土地にオトルすることについて、付近のすなわち同じ地方に住んでいる牧民すべてで一致協議し、オトルに出す馬群を誰と誰が責任をもって引受けて牧畜するかなどを、きちんと決めて、本格的な冬が始まるとともに、事前の相談どおりに、全ての馬群を、牧畜する人びとにその頭数と毛色によって受けとらせる。それらの馬夫たちは、オトルする自分の馬群を記録して受けとり、事前に計画して決めた地方に、馬群とともに遠ざかって行き、引受けたオトル馬群の太った状態を失わず、無事に厳しい季節をのりきらせるために、積極的に努力し、日ごとに時間ごとに、細心に仕事をする習慣をもっているのである。(中略)オトルをしていく馬夫たちは、軽い形式の暖かな住居、飲食料、小さな牧事道具を運ぶ馬車を用いるのが好都合である。そのような車につけた馬は、仕事が終ったらすぐに仲間の所に入れて、余分の労働に使わず、もしある土地から別の土地に移動するときには、馬群にいますまだ使っていない車用の馬を用いて移動すると、問題が生じないのである。(中略)馬群のオト

ルを行なっていく各馬夫は、牧養している自分の馬群を、付近にあるアイルのキャンプの家畜の牧地から遠く離れた牧地に入れて草を食わせることにいつも努める（中略）。そのように多少を問わず、自分たちの馬群をいっしょにまとめて遠方の牧地にオトルして草を食わせ、厳しい時期に元気で太ったままでのりきらせることは、牧民それぞれの労働を節減することとなっているのである」（19―七四―七五頁）。

オトルは、その目的によって、普通、夏秋に行なわれる「家畜を太らせるオトル」*Мат тарга авахуулах отор* (*mat targa avaxuulax otor*)と、冬春に行なわれる「家畜に厳しい時期をのりきらせるオトル」*Мат онд оруулах отор* (*mat ondu oruulax otor*)に、大きく分けられるようである（9―五六頁。18―七二頁。2―四五頁）。

バトナサンは、このような分け方を用いる一方で（6―二五頁）、より細かく、季節それぞれのオトルの特徴、目的についてもべている。すなわち「夏は家畜を太らせる新鮮な牧地のオトルをする」「秋はとも家畜を太らせる青い草のソル（前述―吉田）を求めてオトルする」「冬はゾドから保護し、他の土地に行つて家畜に厳しい時期をのりきらせるオトルを行なう」「春は、孕んでいるかまたは子を持っているメス家畜以外の家畜を分けて、青い草の生えてきた場所でオトルする」（4―二六頁、6―二五頁）春のオトルは、孕んでいるメス家畜または生まれたばかりの子をもっているメス家畜は、体力その他の問題があるので、手もとにとどめておき、それ以外の孕んでいないメス家畜やオス家畜などだけを別に分けて一グループに編成してオトルに出し、

早く生えてきた青草を求め食わせて、厳しい状態からぬけ出させ体力の回復に努めるのである。

以上の各季節のオトルの目的というのも、夏と秋の各オトルの目的は家畜を太らせるという点で共通し、冬と春の各オトルの目的も、厳しい時期、状態をのりきらせるという点で共通していることがわかる。従つてやはり、オトルの目的というのは、夏秋と冬春のそれに大別できるといえよう。

私は、以上の二つのオトルから、天災すなわち暖かい時期のかんばつや寒い時期のゾドなど（特にゾドが重要）が現実襲来したときに、家畜をそれから避難させるオトルというものを区別し、一つの独立した目的をもつものとみてもよいのではないかと考えている。例えばこの、天災から家畜を避難させるオトルと、先に二つ引用した冬季の馬のオトルとは、本来目的が異なることは明らかであろう。こうした天災時の移動というものが、前章において、移動の一つの独立した理由として扱われていたことも、ここで想起すべきであろう。しかもモンゴルの牧畜書には、天災のさいにオトルを行なうことについて特記している場合がしばしばある。それは「ゾドのときに、牧地エサの貯えが不足したために、雪が少なく草がよい居住地を、オトルによつて移動し利用する作業を各地でかなり広く組織していた」とあるとおりである（22―四二頁。他に17―二四〇―二五三頁、9―一六―一八頁）。オトルは、その様式によって、四つの種類に分けられる、イエリン・オトル *epilin otor* (*yertu-yin otor*)、ホトグイ・オトル *хотгуй*

otop (qola-ügei oior) オルトローフ・オトル epreñex otop (örtegalakü oior) アルスィン・オトル arcuñ otop (alus-yin oior) がそれである (4—二六頁)。パトナサンの解説に基づきながら、これらについて説明すると、つぎのとおりである。

イエリーン・オトルは、通常のオトルという意味であり、「牧人が毎年の終りごろに、牧地のホジル気の強く、鹹い植物(ターナ、フムール、マンガル)⁽⁴⁾の生えている地方に行つて、全ての家畜をオトルに出す」ことをいう(4—二六頁、注3)。全ての家畜とは全ての種類の家畜と解すべきである。

ホトグイ・オトルとは、決つたホタのないオトルという意味であり、「家畜の調子にあわせて牧地の新鮮な所に従つて、家畜が泊まる所に(オトルに出た牧人も吉田)泊りつつ行くことをいう」(4—二六頁、注3)。家畜に調子をあわせて頻繁に牧地を変えつつ移動する、最もオトルらしいオトルといえよう。

オルトローフ・オトルとは「ゴビの地で家畜の牧地と水が遠すぎる」という条件のもとで、牧人の半分は牧地に、一方若干のものは家畜に水を飲ませるべき土地に居付いて、家畜をオルトローフするような方法でオトルする」ことをいう(4—二六頁、注3)。これは、よい牧地のある所には水がなく、水のある所にはよい牧地がなく、牧地と水が遠く離れていることが生じうるゴビにおいて、牧人の半分は牧地にとどまり、若干の牧人は水のある所にとどまり、牧地側の牧人は家畜を牧養し、水を飲ませるべきときに家畜を水のある所にむかつて途中ま

で連れて行くと、水側の牧人が待っていてこれを受けとり、連れて行って水を飲ませ、また連れもどして、途中で待っている牧地側の牧人に引渡すという方法である。家畜を駅伝のように牧地側の牧人と水側の牧人が伝送するところから、オルトローフ・オトルという名が与えられたと思われる。従つて駅伝的オトルとも称せば当たるであろう。アルスィン・オトルとは、遠いオトルという意味であり、「家畜のいる牧地が不適當になる(天災などによつて)などによつて、近くのソム、アイマク(ともに行政単位——吉田)の地方に、牧人が家畜を、腹に子のいないメス家畜を別に分けて、移動してオトルする」ことをいう(4—二六頁、注3)。これは天災その他の理由で、現在の牧地が悪化し、他に牧地を求めなければならないとき、自分の所属している行政区画内にそれがなく、境界を越えて、遠方の他の行政区画内にはるばるオトルに出なければならない場合に、孕んだり生まれたばかりの子がいるメス家畜を除いて、遠方に行く力のある孕んでいないメス家畜やオス家畜を連れて行くオトルである。「天災のときに、近くの水、牧地の所にセルゲフするよりも、アルスィン・オトル移動を非常によく準備して組織することが重要である」とのべているものもある(9—二六頁)。

オトルと移動理由との対応関係については、前章で記した(1)、(2)、(4)、(5)、(7)、などがあげられると思うが、中でも(2)の良草を求めること、(7)の天災をのりきることの二つが最も大きなオトル移動の理由であるとみられる。

(イ) ゾーボル・ヌーデル・ヒーフ *зовер нывдэл хийх (zögegehüri ne-güdel küh)* または単にゾーボル・ヌーデル。

ゾーボルとは「運搬」という意味であり、ゾーボル・ヌーデル・ヒーフは「近くに運ぶ移動を行なう」という意味をもつ。この移動については、バトナサンが説明しているところに基づきつつ、私見を加えてその内容をのべてみる。

「牧人たちは、移動労働を節減し、ゾーボルを行なう作業方法を用いているのであり、ゲルの敷地、家畜の休息所^{つえ}を変え、近くの牧地に接近して行くなどにおいて、臨時的な住居を所持したゾーボルをいつも行うようになったのである」(6―五三頁) この文章の表現の仕方や他の記述によると、ゾーボル・ヌーデルは、近年盛んになった移動様式の一つである。それはともかく、これは移動労働の節減のために用いられる。バトナサンは他の場所でもこれを「ノタク・セルゲーの作業を節減する方法」だと記しているところからみると(6―五六頁)、ゾーボル・ヌーデルとはノタク・セルゲーの労働を節減する方法であるという点に大きな意味があるのである。つぎにこれは、牧草の状態が悪くなったことなどを理由としてごく近くの牧地に移動するために、ゲルの敷地と家畜の休息所つまりキャンプ地を変える。この点はノタリ・ソリフと似ている。けれどもこれは本格的なノタク・ソリフではなくて、臨時的な住居つまり小型ゲルやテントを携行するのである。このため一見、オトルのようにも思われる。だが、

「ゾーボル・ヌーデルとは、近くの牧地における牧畜であるという

ことが、意味内容の点で、オトルする作業方法と同じでない」そして「オトルするときのように、家畜群をその内部で群れに分けず、人手を特別に組織することがない、という特徴を有する」(6―五六頁) つまりゾーボル・ヌーデルはオトルに似ているようだけれども、オトルより近い牧地に移動する点でオトルとは異なり、またそのさいに家畜を種類別や孕んでいるメスとそうでないもの、それに同じ種類でも連れて行くものと連れて行かないものなどにグループ編成することなく、全家畜を連れて行き、人間もそのために特別に選出することをしないで、全部が移動して行くというのである。このようにみると、ゾーボル・ヌーデルとは、ノタク・ソリフとオトルの中間的形態の移動であるといえるかもしれない。

ゾーボル・ヌーデルは、ノタク・ソリフを行ないつつ、それに併用されるとともに、オトルのさいにも併用されることがあるという。モソゴル人の説明によると「オトルに行ったのち、ゾーボル・ヌーデルを行なう」(*отгор очоон холно, зовер нывдэл хийхэг*) という表現がある。オトルに出た牧人が、オトルに出た先で、牧地を少しづつ近く近くに移し、そのさい自己の牧養している家畜全部を伴い、携帯している軽便な住居なども運ぶことがゾーボル・ヌーデルの条件にほぼ一致するのであろう。

ゾーボル・ヌーデルの理由の大きなものは、前章で整理した移動理由の(1)の牧草の不足・悪化、(2)のよい牧草を求めること、(3)の家畜の種類と牧草の構成の不对応などであらう。そしてまた(4)の水不足、(5)

のホジル不足なども関連すると考えているが、詳しくは今後の検討課題である。ゾーボル・ヌーデルについて記した文献は少なく、不明の点が多いのが残念である。

(2) ボーリ・ソリフ Gyph comix (baGuri soliqu)

これは今まで記してきた移動とは、質的に異なる移動様式である。

「ボーリ・ソリフというのは、その周囲の牧地を完全に食い終っていないのに、家畜の休み場が泥濘にまみれたとき、その付近のきれいな土地に下営することをいう」とあるように(9―五七頁)、今までのべた移動というのが牧地の条件、状態の悪化の結果またはよい牧地を求めて、牧地を新しく良好なものに変えるために移動するものであったの⁽⁵⁾にたいして、これはキャンプ地の条件、状態だけを理由として行なわれる移動なのである。

キャンプ地には、人の住むゲルのほかに、家畜の休息する場所がある。ここに家畜が夜間休む。当然それらは糞尿をたれ、また雨も降るし霜も降る。そこで、モンゴルのような乾燥した場所でも、キャンプ地は家畜の休息所を中心にして、次第にぬかるみ、そのぬかるみの部分が次第に広がり、種々の害悪が生じることがある。「一つの居住地にあまり長くいると、家畜^{ホトリ}の休息所は泥まみれになって、羊と山羊の毛が黄色くなり、またぬかるみに長く休んだ結果として、山羊の尻がひび割れて、やがてオト^{or} (Ode) という虫がつき、羊の蹄はブヨブヨになって跛となり、近くの牧地の草が悪くなって、キャンプと牧地の間および牧地と水の間の距離が遠くなり、家畜の行程が増大する」と

あるとおりである(9―五七頁)。

ボーリとは、物を置き組み立てる場所、用地、跡地、ゲルを建てる敷地といった意味をもつ。

ボーリ・ソリフの移動理由は、前章でのべた移動理由の(9)の「キャンプ地が家畜の排泄した糞尿によってきたなくなる⁽⁶⁾こと」に当たる。

(4) シャグラジ・ヌーフ Harrak hvax šaglaju negikü

これは内蒙古のモンゴル人から教えられたものであり「一つのアイルが移動して行き、間もなく別のアイルが移って来ることを」いい、「それほど変わったことではない。経験豊かな牧民の話によると、一つの居住地に長く住むと、家畜がその牧地に飽きることがあるという。Aアイルにおける《古い》居住地は、Bアイルにとって《新しい》居住地となる⁽⁵⁾」のである。

シャグラジとは、シャグラフ Harrak (šaglaqu) つまり返し針をして目を細かに縫うという意味をもつ動詞であり(21―八三〇頁)、従ってシャグラジ・ヌーフとはまさに、一アイルが去ったそのあとに、別のアイルが来るということになるのである。そしてそういう内容の移動は、上述した移動とは極めて異なるものであり、そこで私としては、本章でこれを抜かうことをためらったが、このシャグラジ・ヌーフをひきおこす理由が面白いということもあって、特にとりあげたのである。

家畜が同じ場所にいつまでもとどまっていると心理的に落着かなくなり、草の食いも悪くなることは事実であり、このことが牧民のさか

んな移動をひきおこすことは確かである。

例えば牛の夏の牧養について「一つの牧地に長くいさせて憂鬱にさせないために、牧地を短期間に、順序を立てて区分して取換える」とのべられ（9—180頁）、また十九世紀の文献にも「家畜が子を生むとき以外は、多く移動して草を食べさせる。家畜は興味をもって、太る」とある（15—151頁。その現代語訳二—四頁）これらはハルハーモンゴル人民共和国側の資料である。家畜の精神衛生を考えての移動というのは、モンゴル全体に存在しているのである。

牧民が家畜の心理、精神衛生を常に考えながら遊牧していることを示す他の例を二つあげておく。「ラクダは、自分の足跡がはっきりしている牧地に行かせると、落着きが悪いので、毎日の牧地を選定するさいに、その自分の足跡のあまりはつきりしていない場所を選び、一度牧養した場所には、数日後牧養すべく、牧地の割当をすることが大切である」（13—133頁）「家畜の居住地が（家畜に——吉田）合っていないならば、家畜は気持ちが悪く落着かずについて、苦しむ。よい居住地でも、家畜が慣れていないせいで、生活しにくく落着かないかもしれない」（13—161頁）。

このシャグラジ・ヌーフをひきおこす理由——この移動の理由が必ずシャグラジ・ヌーフのみを導くということではない——というのは、前章でのべた移動理由の④の「家畜が牧地に飽き、食欲が減退することを避け、逆にその食欲を増進させること」であるが、これは既述のように、私がこのシャグラジ・ヌーフにたいする考察の結果、移動の

独立した理由になり得ると考えて加えたものである。

なお、この移動は、草が良好な牧地において生じるであろう。

結 び

以上、モンゴルの遊牧における移動の理由といくつかの移動の種類についてのべ、その相互の関連についても触れた。

モンゴルの遊牧においては、こうした移動の種類が存在することによって、さまざまな理由に基づく移動の必要にこたえることができたのである。これらのいくつかの様式の移動は、こうしたその時その場の牧畜の必要にこたえるために、それらが本来もつ特色を牧民に利用され、そうしてモンゴルの遊牧の移動の全体が構成されてきたのである。

その構成の骨格はつぎのようであろう。基本的移動としてノタク・ソリフが存在し、さまざまな移動理由にこたえている。季節的移動の全て、季節内の移動と称すべきものの多くも、この移動の形をとる。

一方季節的な牧畜の目的のためや天災の場合に、移動理由のいくつかにこたえて、滞在している居住地からオトル・ヌーデルが行なわれる。そして牧民と家畜それに居住地も一時的に分かれるが、やがて合一する。ノタク・ソリフとオトル・ヌーデルの双方に、両者の中間的形態の特色をもつゾーボル・ヌーデルが併用され、これによって牧民の移動作業は節減され、移動が容易に行なわれる。これらに加えて、牧地

の問題と無関係なキャンプ地の汚れに対処するためにキャンプ地だけを移すボーリ・ソリフが行なわれ、こうして移動のあらゆる必要がほぼ満足させられるのである。

註

- (1) 「」内の算用数字「7」は「参考文献」にあげた文献の番号。漢数字「一六九」と「一八一」はその文献の頁数。以下同じ。
- (2) 後藤富男氏はオトルを「馬群りの居住所」と説くところ（『一四四頁』）。
- (3) 「オトナキ」は「この地域に接しているすべての部族はオトルを行なっている」という意味で「一四四頁」が「この地域」にならば何となく通じようである。このように問題は今後の検討課題である。
- (4) オートタナ (taGana) = A. polytrichum Turcz. トイード хумуул (kōmīl) = A. mongolicum Rgl. トンキード мангир (sanggi) = A. senescens L. (註一) 一〇一—一〇四頁)。⁹ オキキ系属の植物である。
- (5) 内蔵古文字のチイシチンジャン（鶴精扎布）氏の私宛八月二日付手簡からの引用である。原文は以下のとおりである。⁹ 「Нэг айл нууж яваад удаггүй өөр айл нууж ирэхийг «шаглаж нуух» гэж хэлдэг бөгөөд энэ нь тийм сонин хэрэг биш. Хашир малчдын хэлэхээр, нэг нутагт удаан суунал мал нь тэндхиймчээрээ уйлах явдал бий гэнэ. “А” айлдаан «хуучин» нутаг нь “Б” айлдаа «шинэ» нутаг болж байна шүү.”

参考文献

- 1 後藤富男『内陸アジア遊牧民社会の研究』吉川弘文館、一九六八。
- 2 吉田順一『モンゴルの遊牧の根柢』『モンゴル研究』一一、一九八〇、三九—四九頁。
- 3 吉田順一『北方遊牧社会の基礎的研究——モンゴルのステップと家畜——』『中国近代史研究』雄山閣、一九八〇、二二四—二四六頁。
- 4 Батсан, Г., Нэгдэлчдийн нүүдэл, суурьшлын зарим асуудал, *Studia*

Монголын遊牧における移動の理由と種類について

Ethnographica Tomus IV—Fasc. 9, Уланбаатар, 1972, pp. 109-157.

- 5 Батсан, Г., Нүүдэл суурьшлын тухай товчоон, Шинжлэх Ухаан Амьдрал, 1966, Уланбаатар, 1973, pp. 53-64.
- 6 Батсан, Г., БНМАУ дахь нэгдэлчдийн аж ахуйгаа хөглөх арга ажиглага, *Studia Ethnographica, Tomus. VI—fasc. 1, Уланбаатар, 1978.*
- 7 Бат-Очир, Л. (Хариуцлагатай редактор), БНМАУ-ын социалист хөдөө аж ахуйн түүхийн зарим асуудал, Уланбаатар, 1976.
- 8 Гонгор, Д., Халх Товчоон II, Уланбаатар, 1978.
- 9 Даш, М. (Ерөнхий редактор), Монгол орны бичээрийн мал маллаганы арга туршилага, Уланбаатар, 1966.
- 10 Жагараг, Н., Аратство и аратское хозяйство, Улан-Батор, 1974.
- 11 Жагараг, Н., БНМАУ-д мал аж ахуй эрхлэх системийн тухай асуудал, Шинжлэх Ухаан Амьдрал, 177, Уланбаатар, 1975, pp. 18-27.
- 12 Дхагваж, Н., Бичээрийг хуваарьтай шингэлх арга, Уланбаатар, 1979
- 13 Минтуб, Ц., Баатар малчид, Уланбаатар, 1966.
- 14 Насанбалжир, Ц., Монголын аж ахуй хөдлөлтийн уламжлал, шинэтгэл (XIX зууны эцэс XX зууны эхэн), Уланбаатар, 1978.
- 15 Напалдорж, Ш., Төвөн түүний сургаал, *Монumenta Historica Tomus V—Fasc. 2, Уланбаатар, 1968.*
- 16 Ратчаа, Т. (Ерөнхий редактор), Малчдын санамж бичиг, Уланбаатар, 1978.
- 17 Sambuu, J., *Mal equi degere ben yaGakiyu ejillaqu tuqai atad tu bakiy sanaGula sorGai, Уланбаатар, 1945.*
- 18 Самбуу, Ж., Малчдад өх зөвлөгөө, Уланбаатар, 1956.
- 19 Самбуу, Ж., Малчин ардын амьдрал ахуй, хэв заншиас, Уланбаатар, 1971.
- 20 Цэвэл, Я., Кочевки, Современная Монголия, 1933 № 1, Улан-Батор, pp. 27-31.
- 21 Цэвэл, Я., Монгол хэлний товч тайлбар толь, Уланбаатар, 1966.
- 22 Чойжигжав, Х., Зудын тухай зарим асуудал ба малчдын туршилагаас,

Улаанбаатар, 1968.

83 Шульженко, И. Ф., Животноводство монгольской народной республики, М.—Л, 1954.

84 Юнатов, А. А., Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын хадган бичээрдэх тэжээлийн ургамлууд (Кормовые растения пастбищ и сенокосов Монгольской Народной Республики), Улаанбаатар, 1968,

85 Юнатов, А. А., Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын ургамлан өмөрлөгийн үндсэн шинжлүүд (Основные черты растительного покрова Монгольской Народной Республики), Улаанбаатар, 1977.